

4. 湿原植生の制御

提言

河川環境の指標であるハンノキ林の急激な増加やヨシ・スゲ群落の減少に対し、湿原植生を制御する対策をすべきである。

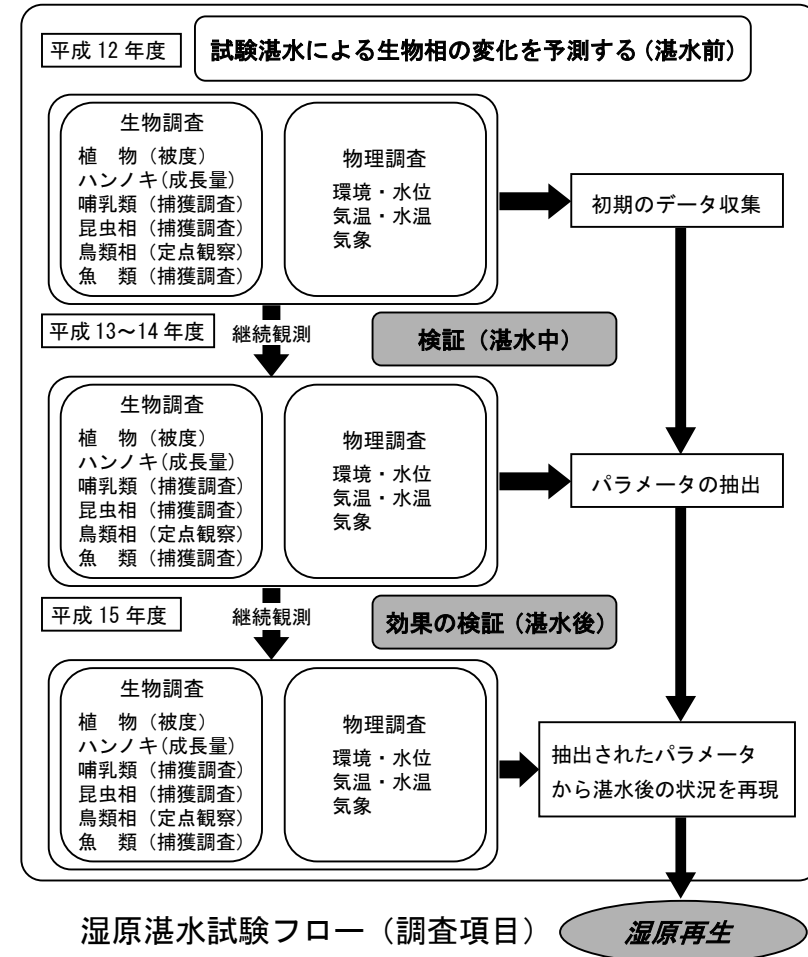
具体的施策

- 地下水位、冠水頻度の変化
- 土砂や栄養塩の防止による制御

これまでの調査・検討結果

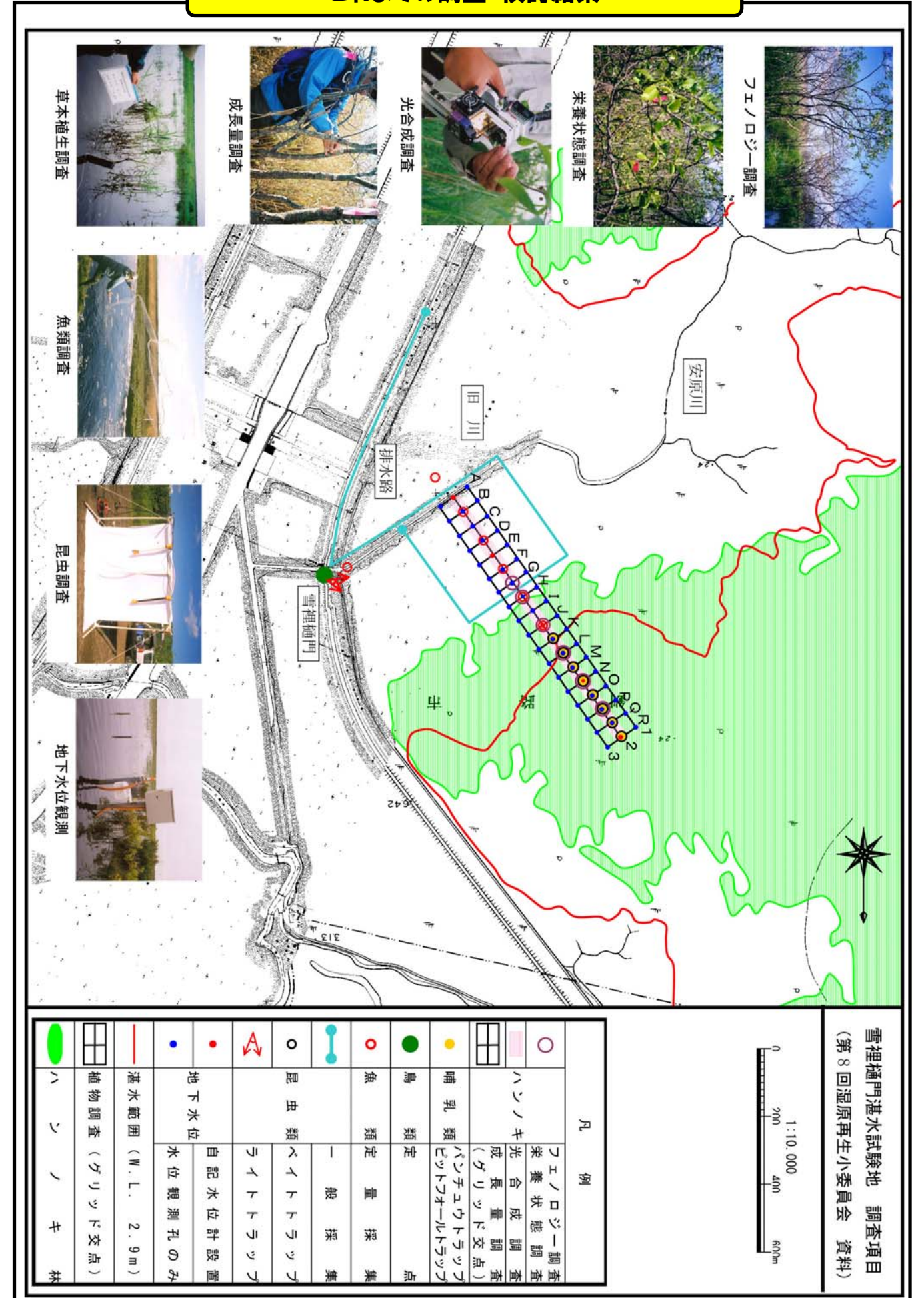
○湛水試験の目的（第3回湿原再生小委員会資料）
「湛水前後の動植物動態モニタリング」と「湛水後の動植物の分布状況の予測」を目的とする。

○調査概要（第3回湿原再生小委員会資料）



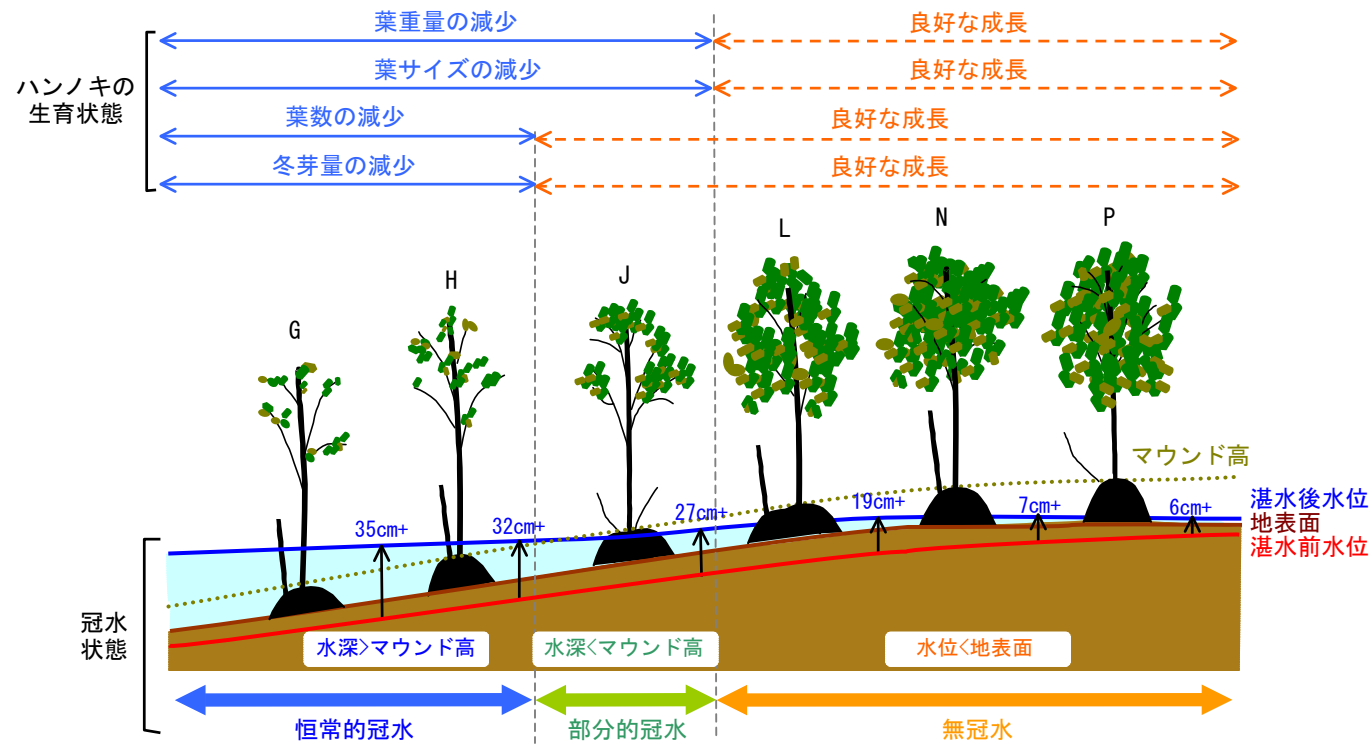
湛水開始：平成12年9月
湛水位：標高2.90m（湛水前に比べ約1.5mの上昇）
湛水面積：約200ha

これまでの調査・検討結果



これまでの調査・検討結果

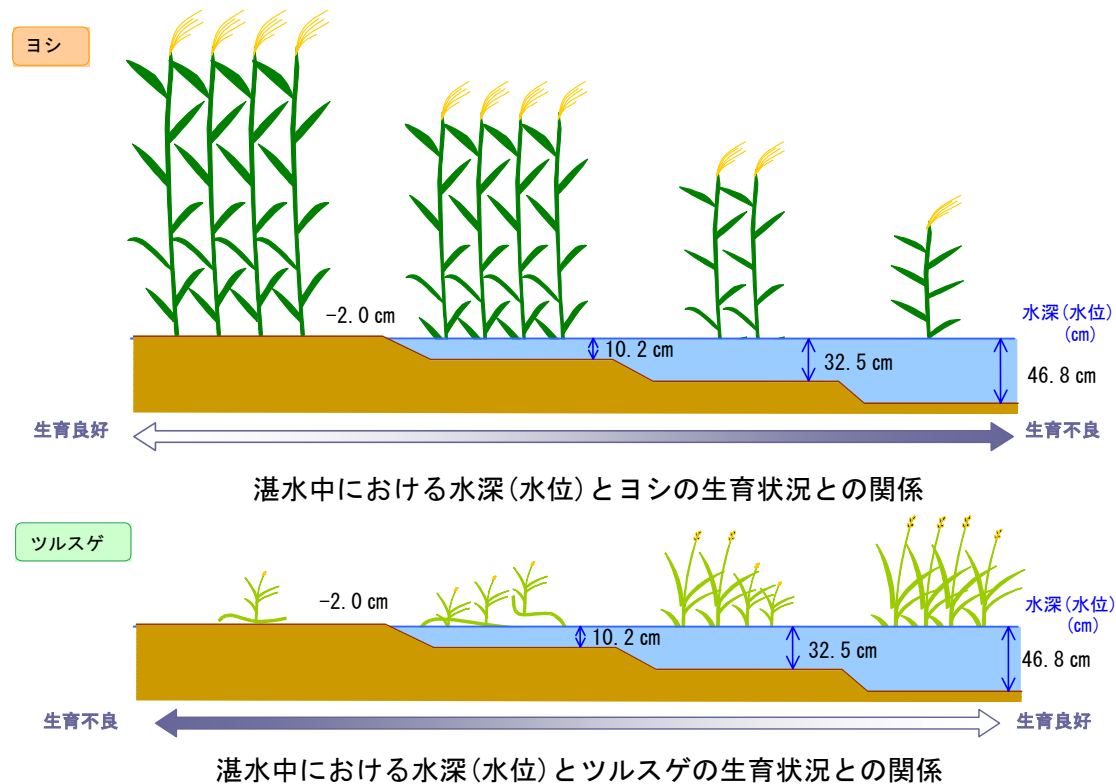
○ハンノキ関連調査概要 (第8回湿原再生小委員会資料)



各調査区におけるハンノキの冠水状態と冠水による影響

注) 図中の+は湛水前後における水位の上昇幅を示す(詳細は参考資料)。

○草本植生関連調査概要(ヨシ・ツルスゲ) (第8回湿原再生小委員会資料)



＜冠水した場所におけるヨシ、ツルスゲの生育状況について＞

- ・冠水した場所では、ヨシは著しく生育不良となるのに対して、ツルスゲは直立茎を伸ばさせて旺盛に生育する。
- ・強度の冠水状態が続けば、ヨシ群落が衰退することが懸念されるが、水深が地表面付近の場所での生育が良好であったことから排水後に回復する可能性がある。

これまでの調査・検討結果

○魚類関連調査概要 (第8回湿原再生小委員会資料)

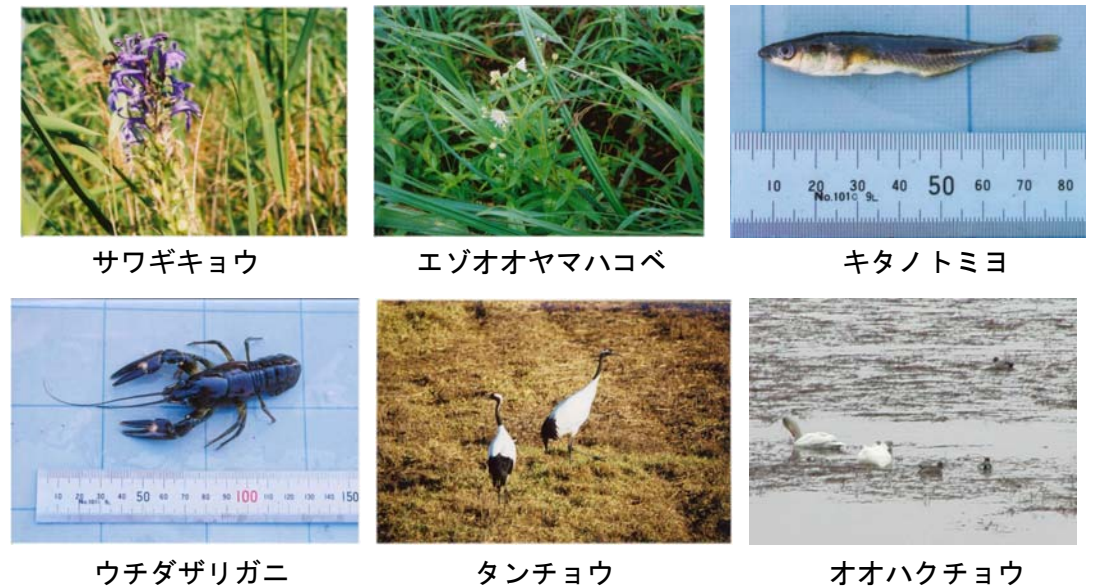
湛水後に湛水域において生息が確認されなくなった種としては、ギンブナ、エゾウグイの他に回遊魚であるサクラマス、イトヨおよびヌマチチブがあげられる。これら5種は、湛水施設の設置により、遡上障害を受けている可能性がある。

湛水前後における魚類の確認状況

科名	種名	生活史タイプ	樋門上流 (湛水域)		樋門下流	
			湛水前	湛水後	湛水前	湛水後
ヤツメウナギ	1 シベリアヤツメ	陸封魚				●
	ヤツメウナギ科 (幼生)					●
コイ	2 ギンブナ	純淡水魚	○	●	○	●
	フナ属	純淡水魚		●	○	●
	3 ヤチウグイ	純淡水魚	○	●	○	●
	4 エゾウグイ	陸封魚	○	●	○	●
	ウグイ属				○	●
ドジョウ	5 ドジョウ	純淡水魚	○	●	○	●
	6 エゾホトケドジョウ	純淡水魚	○	●	○	●
キュウリウオ	7 ワカサギ	遡河回遊魚			○	●
サケ	8 サケ (稚魚)	遡河回遊魚				●
	9 サクラマス(ヤマメ)	遡河回遊魚	○	●		●
	10 アメマス	遡河回遊魚				●
トゲウオ	11 イトヨ	遡河回遊魚	○	●	○	●
	12 エゾトミヨ	陸封魚	○	●	○	●
	13 キタノトミヨ	陸封魚	○	●	○	●
ハゼ	14 ジュズカケハゼ	陸封魚			○	●
	15 ヌマチチブ	両側回遊魚	○	●		
カレイ	16 ヌマガレイ	周縁性淡水魚				●
8 科	16 種		5科10種	3科6種	5科10種	8科15種
サリガニ	ウチダザリガニ		○	●	○	
1 科	1 種		1科1種	1科1種	1科1種	

注) 太字は重要種を、網掛けは湛水試験後に湛水域において確認されなくなった種を示す。

○その他試験地で確認された生物

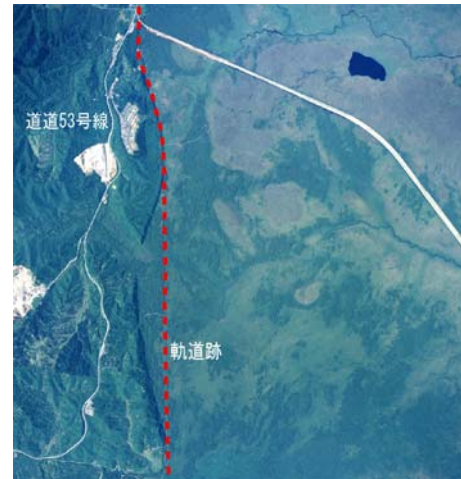
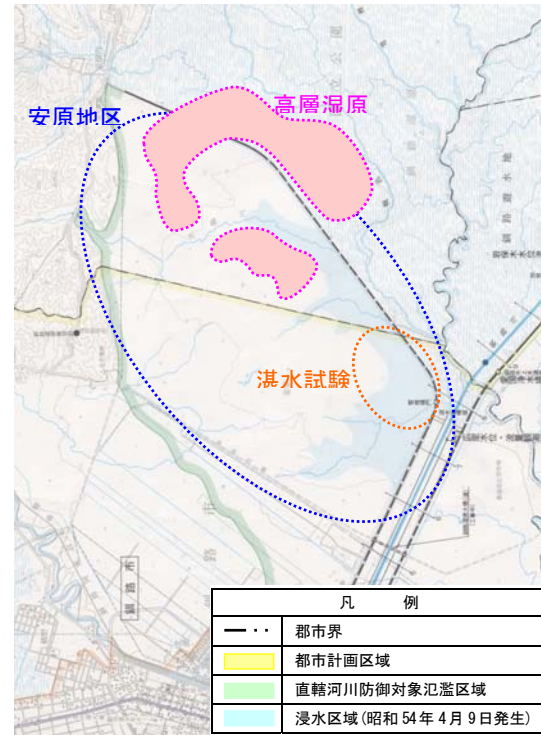


これまでの調査・検討結果

○安原地区（第8回湿原再生小委員会資料）

安原地区の現状

- 湛水試験地の北側約 2.5km のところに赤沼を中心とする高層湿原が分布している。
- 高層湿原は右岸堤防によって南北に分断されている。
- 安原地区は近年ハンノキ林が急激に増加している。
- タンチョウやキタサンショウウオ等の湿原に特有な野生生物が生息する。
- 右岸堤防や村営軌道線跡等の構造物により通水阻害となっている可能性がある。
- 自然再生への市民参加や環境教育等を行なう場として活用できる。



【右岸堤防建設の経緯】

1920 年：旧釧路川の氾濫をきっかけに新釧路川が掘られ、西側に堤防兼道路ができる。
1980 年：遊水地事業の開始により堤防を拡幅する。

その後、釧路沖地震によって一部が破壊されると堤防の裾野を広げる補強工事を行なう。

安原地区の状況

平成 15 年度実施(検討)内容

- 抜水後の生物の反応
 - ・ ハンノキ（展葉パターン、栄養状態、光合成）
 - ・ 草本（植生調査、ヨシ・ツルスゲ）
 - ・ 動物（鳥類、魚類）
- 水管理計画検討
- 施設の概略、詳細検討